

3歳未満児の感覚・運動遊びを促す 手作りおもちゃの意義と役割

太田早津美

The Meanings and Roles of Some Handmade Toys that Stimulate Sensorimotor Play
for Children under 3 Years Old

Satsumi OHTA

はじめに

近年、女性の就労率が高まり共働き家庭が増加する中で、3歳未満児の保育の需要が高まってきた。待機児童対策がなされ、小規模保育所をはじめとする保育の場が急速に確保される中で、そこで行われる保育の質が問われている。保育所保育指針解説書は、保育所保育指針の目指すところは保育の質の向上であり、入所する子どもの最善の利益を保障するためには人的、物的環境が重要であることを示している。

特に3歳未満児においては保育所等で関わる保育士との関係性が愛着関係を育み、身近な大人への信頼感につながっていく。また、その環境は乳幼児にふさわしい安全安心な場であり、発達に即した応答性のあるものでなければならない。

特に0歳児においては発達のスピードが著しく、その進み具合には個人差があることから、子どもの発達に相応した関わり方や保育環境を整えていくことは大変重要であると考えられる。

多くの乳児保育の現場においては、保育業務の傍ら、時間を見つけて保育士が制作した手作りおもちゃが数多く存在している。それは、保育室に手作りの温かさを感じさせ、乳幼児が手を触れてみたいと思えるような主体性を引き出し、遊びの楽しさを感じさせるものとなっている。

筆者は長年手作りおもちゃの研究に取り組んでおり、身近な素材を利用した、乳幼児の発達に応じて手軽に作れるおもちゃの制作に取り組んできた。本研究においては乳幼児の感覚・運動能力を育む物的環境として、乳児保育における手作りおもちゃの意義や役割について取り上げてみることにする。

I. 子どもの発達とおもちゃ

1. 子どもの認知の発達

乳児は、自分以外の「人」や「もの」を見たり、触れることから、温かい・冷たい・柔らかい・硬い・つるつるしているなど、ものと関わり、遊びながらいろいろなことを学んでいく。清水は「乳児期はピアジェ (Piaget) の発達理論で言えば、感覚運動期に相当する。1歳ころまでは「表象 (representation)」の発達が不十分で、言葉もつかえないので、感覚や運動動作によって直感的に対象を認知する時期である。(清水2013)⁽¹⁾」と示している。

乳児が手を伸ばし触って確かめるといった能動的な行為や経験が、五感に刺激を与え、やがて様々なものの理解・判断・論理といった認知的発達を高めていく。認知的発達は脳の発達と関係し、おもちゃは子どもの認知的発達においても重要な役割を持っている。

表 I-1 ピアジェが考えた発達段階

時期	年齢	特徴
感覚運動期	誕生～2歳	反射、シエマ（認知の枠組み）の形成、シエマの協調
前操作期	2歳～7歳頃	表象、象徴機能の出現、中心化（自己中心性）
具体的操作期	7歳頃～11歳頃	保存性の確立、分類の理解
形式的操作期	11歳頃～15歳頃	思考の内容と形式の分離

出典：清水益治・森敏昭 編著「0歳から～12歳児の発達と学び」第1章 表1-1より

2. 3歳未満児の遊びとおもちゃ

(1) 0歳児の遊びの特徴

0～3か月頃は、機嫌のよい時には吊り下げられたおもちゃを見て喜んだり、大人がガラガラを振ってあやすと音を楽しんだり動きを楽しんだりする。4か月頃になると目に映ったものに興味をもち、手を伸ばして触ろうとする。動いているものを追視できるようになり、手を伸ばし触ることができるようになると、感触を確かめたり、おもちゃを振ったり、たたいたりする。手指の発達が進むと色々なおもちゃに興味を持ち遊べるようになる。7か月頃になり一人で座って遊べるようになると、つまんで中から引っ張り出す遊びや、マラカスを振って音を楽しんで遊べるようになってくる。ハイハイができるようになる時期には、転がったおもちゃを追いかけて遊ぶことを楽しむようになる。このように0歳児にとっては月齢に応じたおもちゃを用意しておくことで遊びの世界を広げていけるようになる。

また、この時期に重要なことは、子どもと一緒に遊んでくれる保育者（大人）の存在である。子どもの興味に合ったおもちゃを与え、あやしたり声をかけながら一緒に遊んでくれる存在が重要である。

そうしたかわりを通して、人と関わる楽しさや言葉を覚えていく。

(2) 1歳児の遊びの特徴

握ることやつまむことが上手になり、手指を使って遊べるが増えてくる。一人遊びができるようになり、絵本を見たり入れたり出したりすることができるおもちゃでじっくり遊べるようになる。穴落としのおもちゃや積み木やブロックを積んでは倒すなどの遊びを楽しむようになる。また、歩けるようになると、遊びの幅が大きく変わり、まてまてとボールを追いかけて遊べるようになる。表象機能の発達とともに、見立て遊びができるようになり、ままごとのおもちゃを使って、食材に見立てたものを食べる真似をして遊べるようになる。この時期は生活の中で経験したことを再現した遊びを少しずつ楽しめるようになる。保育者とのかわりの中で、言葉のやり取りを楽しめるよう、分かりやすくゆっくり話しかけるようにすることが大切である。

(3) 2歳児の遊びの特徴

言葉の発達とともに見立て・つもり遊びが盛んになり、〇〇になりきって、自分のイメージの世界で楽しんで遊ぶ姿が見られるようになる。〇〇ごっこといった遊びをしていく中で、次第に子どもどうしのかかわりができてくる。遊びに必要な箱型の台や仕切りになるようなものを自分で運んで空間を作り遊ぶようになる。子どもが没頭して見立てつもり遊びを楽しんで、何かになりきっている時には、保育者がむやみに声をかけず、子どものイメージを壊さないように見守ることが大切である。また、色々と工夫したり考えて遊べるようになるので、大きめで簡単なブロックを組み立てて遊んだり、パズルボックスなどの考え工夫して遊ぶおもちゃでじっくり遊べるようになる。こうした子どもの興味ににあったおもちゃを配置し環境づくりしておく必要がある。

3. 発達の特徴から考えた物的環境としての手作りおもちゃ

子どもの遊びを豊かにするためには、発達の特徴を考えた物的環境としてのおもちゃの存在がある。3歳未満児の遊びの特徴から各年齢で用意したいおもちゃについてまとめる。

(1) 0歳児前半は、視覚や聴覚を刺激しながら保育者(大人)との関係性を作っていくおもちゃとして、がらがら、おしゃぶり、音の出るおもちゃ、吊り下げのおもちゃ、ぬいぐるみ、布製のボールなどがあげられる。また、動くものをジーと見たりするので、転がったり、コロコロと動くところが見えるおもちゃを用意する。

0歳児後半はハイハイができるようになるのでボールや車など、移動したり転がっていくおもちゃを用意する。一人で座れるようになったら、しばらくはクッションの背もたれやドーナツ型のクッションに座らせて遊ばせると安心である。この頃ティッシュペーパーの中身を引っ張り出して遊ぶことに興味を持つことから、引っ張り出して遊べるおもちゃがあるとよい。



繫いだハンカチを引っ張り出して遊ぶ

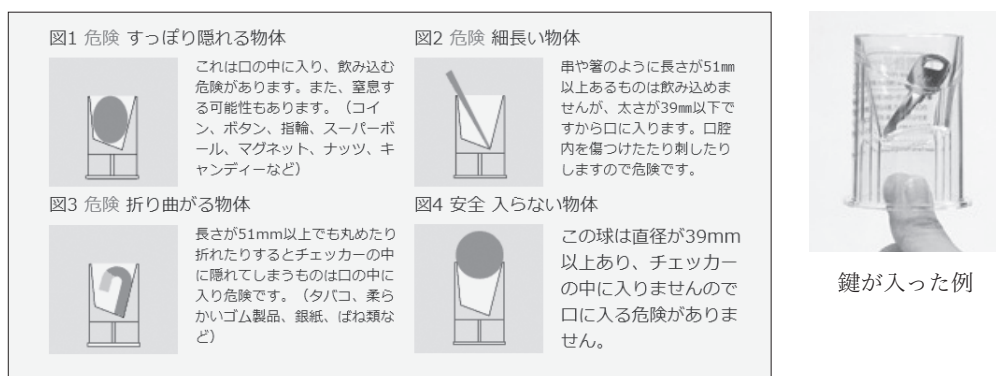


図 I-1 誤飲チェッカーの危険と安全の判断

(誤飲チェッカーの図と写真は一般財団法人 日本家族計画協会 ホームページより抜粋)

おもちゃは子どもの手の届きやすいところに置き、興味をもって触ったり、ハイハイを促したりできるようにする。また、床の清潔や安全に気を付ける。特に誤飲しないように、口に入れそうな小さくて丸いものやとがったものに気を付ける。危機管理対策として、おもちゃの大きさは誤飲チェッカーを使って確認しておくことと安心である。

(2) 1歳児のおもちゃは、手指を使った遊びが楽しめるようになるので、ウレタン積み木（投げても安全である）や大き目のブロック、穴落としのおもちゃを用意する。出したり入れたり繰り返して遊ぶおもちゃが良い。また、お人形、ぬいぐるみといった抱っこして気持ちが安定するおもちゃや、延滞模倣のできるままごとセットを用意する。お皿やお鍋、エプロンや人形の布団などがあるとなりきって遊ぶ雰囲気づくりになる。一人遊びがじっくりできるように、低いパーテーションなどがあるとよい。また、車や電車といった生活の中で見かけるものを想像させるおもちゃがあると、遊びのイメージがより膨らむ。



牛乳パックの車

次第に落ち着いて一人遊びができるようになるので、簡単なパズルなどの工夫し集中して遊ぶおもちゃを用意する。

(3) 2歳児のおもちゃは、工夫し考えて遊ぶおもちゃや、見立て・つもり遊びができるおもちゃと、空間作りが必要となる。この頃になると、生活の中で経験したいろいろな場面を再現して遊ぶことが盛んになるので、部屋の一角にままごとコーナーを作る方法もあるが、いろいろなバリエーションで遊ぶようなパーテーションや大型積み木（牛乳パックで作ったブロック）で、他の遊びと分ける工夫も必要となる。

また、指先が器用になり、小さなものをつまめるようになることから、ひも通しや小麦粉粘土など、じっくり遊ぶおもちゃを用意する。

II. 身近な材料を生かした手作りおもちゃ

1. 手作りおもちゃの実践事例

3歳未満児の遊びは月齢により認知的な発達や手指の発達、身体的運動機能の発達が著しく変化していくことから、保育現場でその発達に合った既製のおもちゃをタイミングよく量的に用意することは容易ではない。そうしたこともあり、筆者は身近な材料を使った手作りおもちゃを考案してきた。

筆者が考える子どもの喜ぶおもちゃのポイントは、「何かな？」とわくわくして主体的に遊びたいと思えることである。手作りおもちゃには既製品にはない素朴な良さがあると考えている。

子どもを笑顔にする条件は、①安全で安心して遊べる。②持ちやすい、つまみやすい。③動く、くるくる回る。④穴に落とす。⑤音がする。⑥考えたり工夫ができることであると考えている。こうした条件を考え、誤飲しない大きさや、なめても安心して清潔に管理できる素材選びを考えている。

筆者はそうした条件を考えながら、身近な廃材や廃物を利用して作成することは、エコ活動の一環としてとらえている。特に、ダンボールや牛乳パック、ペットボトル（キャップも含む）は手作りおもちゃの材料として欠かせない貴重な資源である。筆者が保育を学ぶ学生と一緒に廃材や廃物を利用した手作りおもちゃの制作をする意図は、限りある資源の活用を考えねばならない循環型社会の課題について、自然環境や資源を大切にすることを意識してほしいからである。そして、子どもに手作りおもちゃを大切に扱うことを教えていくことで、毎日の生活の中で物を大切にすることが育つように導いて欲しいと願っている。

しかし、最も重要なことは子どもが手作りおもちゃに興味を示し、手に取って遊んでみようという興味がわくものを作ることであり、危機管理上の配慮もしながら、安心、安全に遊べる手作りおもちゃを物的環境の一つとして作っていくことである。こうした視点で作成した手作りおもちゃを紹介する。

事例1：チェーンリングがらせん状に落ちてくるおもちゃ

材料： ペットボトル 針金 チェーンリング ビニールテープ

らせん状にした針金をカラフルなチェーンリングが、からからと音を立てて針金をつたって降りてくるのを追視しながら楽しむことができる。手に持って遊べるようになると、自分で上下を入れ替えて遊ぶようになる。針金のはみ出た部分は危険がないようビニールテープで覆う。



落ちてくるチェーンリングを追視

事例2：マラカス

材料：ペットボトル 中身（ビーズ・すず） カラーゴム ビニールテープ

音がするおもちゃは子どもの興味を引き、曲に合わせて振って遊んだりできる。中に入れる材料の工夫で音の違いを楽しめる。



マラカスをもって曲に合わせて踊る

事例3：音のするコロコロ転がるおもちゃ

材料：牛乳パック カラー段ボール 中身（鈴、ビーズ、お米） 色画用紙 OPP テープ

0歳児のハイハイをする時期に、コロコロと転がるのを追いかけて遊んだり、一人で座れるようになると、手に持って振って遊んだりするようになる。音の違いを楽しめるよう中身の材料を工夫すると良い。また、大小の大きさに作っておくと積み上げて遊ぶことも楽しめる。この時期はすぐに口に持っていくので、舐めても拭いて清潔を保てるようにOPPテープでコーティングするとよい。

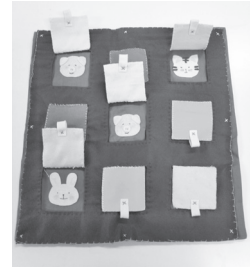


転がったおもちゃを追いかけてとろうとする0歳児

事例4：いないないばあ

材料：キルティング生地 フェルト リボン

いないないばあの遊びが楽しめる様になったところに、何が隠れているかフェルトを「パア」といいながらあけてみる。2歳児になると同じ動物のいるところをあけるゲーム的な遊びに使える。フェルトの手触りも気持ちがいい。



いないないばあ

事例5：音が出る絵本

表紙と見開き2ページの絵本。絵の下に鳴き笛が入っていて押すと音が出る仕掛けである。単純な展開で種類を多く作ると、表紙をめくり、音を出すことに興味を持ち楽しめる。

材料：ダンボール 色画用紙 鳴き笛 ブッカー



すいかとたまごの絵本



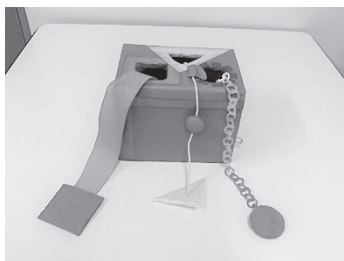
絵本を開いてすいかやひよこを触ると
プーと音が出る

事例6：ひっぱりだし箱（2種）

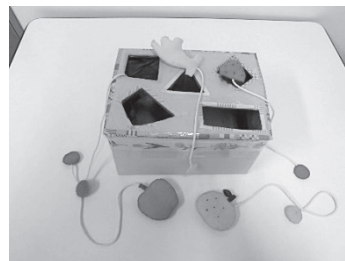
引っ張り遊びがしたい0歳児のための引っ張りだし箱。「まだまだ出てくる。」「何が出てくるかな?」とわくわくしながら遊べる。リボンやひもを箱の中で固定しておく。

①材料：ダンボール 色画用紙 リボン ひも チェーンリング

②材料：ダンボール 色画用紙 フェルト 手芸用綿 ひも



①引っ張るとどんどん出てくる箱



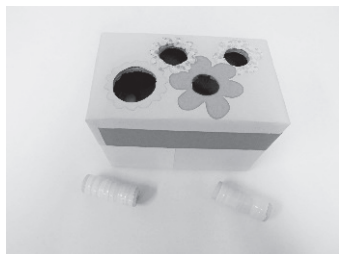
②引っ張るとくだものが出てくる

事例7：穴落とし（2種）

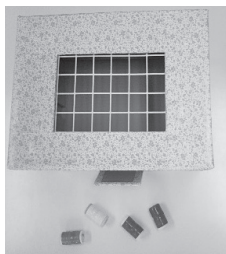
4個～6個のペットボトルのキャップを繋げ、穴に落とす遊び、単純だけれどもよく集中して遊ぶ。キャップの数は誤飲しないために2個は避ける。

②の穴落としは、子どもがグレーチングに物を落とす姿を見て考案した。

材料：ダンボール 色画用紙 ペットボトルキャップ ビニールテープ ワイヤーネット



①大小の穴のある穴落とし



②ワイヤーネットを使用した穴落とし

事例8：見立て遊びの食材

材料：布 ペレット（中身）



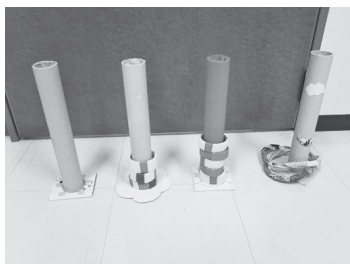
色んなものに見立てられる

ままごとの食材を本物のような形に作るのではなく、カラフルな筒状の形のを、様々なイメージで捉えて見立て遊びに使う。同じ緑の筒状のをきゅうりに見立てたり、菜っ葉に見立てたりすることができる。赤はイチゴやトマトに見立てることができる。

保育者が「これはなに？」と聞いて、子どもがイメージしているものを言葉に出すことで、言葉のやり取りを楽しむことができる。中身のペレットの感触も楽しめる。

事例9：わっかはめ

材料：ラップの芯などの紙管（ここで使用したものは、印刷機マスターの芯） カラー段ボール 色画用紙 ビニールテープ（3色）



輪の大きさ次第で遊びが広がる

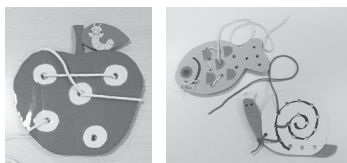
紙管(紙芯)を立つように台座を付ける。カラー段ボールを2cm程度の幅に切り、輪にしてビニールテープで止める。3色のカラーのビニールテープがわっかのデザインとなる。作ったわっかはめて遊ぶ。わっかの大きさを少し緩くすると遊べる年齢層が広がる。
この芯は新聞紙をねじって大き目の輪を作れば、輪投げにも利用できる。

事例10：ひも通し（2種）

ひも通しは指先が器用になり、じっくり集中して遊べるようになる2歳児に適している。形を作って表裏でひもを通すものや、絵カードの穴にひもを通し何枚も連ねていく方法がある。



ひも通しで遊ぶ2歳児

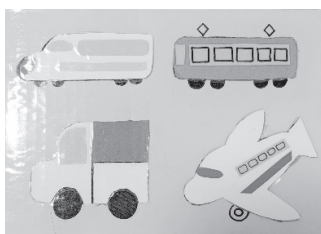


材料：ダンボール 色画用紙 ひも セロテープ
(紐の先をセロテープで巻き、硬くして穴に通しやすくする)

事例11：パズル

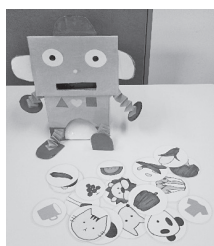
形をはめて遊ぶだけでなく、その下にも絵が書かれていて、何が出てくるかを楽しみながら遊べるパズル。めくる部分を大小の円形にしておくと対象年齢が広がる。

材料：ダンボール 色画用紙 OPP テープ リボン



OPP テープでコーティング 下に何が隠れているかわくわくしながらあけている 2 歳児

事例12：パクパクロボット



動物やキャラクターバージョンもある

ロボットの口にラミネートしたカードを入れると下から出てくる。入れると出てくるおもしろさから繰り返し集中して遊べる。動物や子どもの好きなキャラクターのものを何種類か作成して、同時に複数の子どもが遊べるようにすると、おもちゃを取り合うことが少なくなる。

材料：ダンボール 色画用紙 ラミネートフィルム

事例13：カードおとし



方向を確かめながらカードを入れる 2 歳児

縦、横に切り込みが入った箱にカードを差し込んでいく遊び。カードの向きを考えながら入れていく。切込みの溝の幅は狭いので複数枚のカードを入れることはできない。ゆっくり落ち着いて遊べる時間に、不要になったカードやかるたなどを使用して遊ぶ。

材料：牛乳パック 色画用紙不要になったカード やかるた

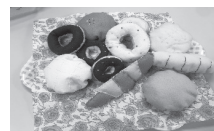
事例14：ままごと遊びの食材（おすし・パン）

ままごと遊びの食材としてフェルトで作ったお寿司とパン。

子どもが興味を示してままごと遊びができるよう、おいしそうに見えるよう工夫した。



お寿司



パン

材料：フェルト 手芸用綿 刺繍糸

III. 保育現場における手作りおもちゃに関するアンケート調査

1. K市保育所の乳児保育担当者への調査

保育現場では保育士が工夫を凝らした手作りおもちゃを作成し、子どもの遊びに取り入れているのを見かける。具体的にどのような手作りおもちゃが活用されているのかを調査し、それを使って遊ぶ子どもの反応や、既製のおもちゃと手づくりおもちゃの役割の違いをどのように感じているかなどについてアンケート調査を行った。

(1) 調査内容

①対象者：乳児保育担当者60名

回答者53名（担当クラスの内訳：0歳児クラス8名 1歳児クラス19名
2歳児クラス24名 混合クラス2名）

②方法：質問紙による無記名アンケート

(2) 回答内容（抜粋）

①各担当クラスの手作りおもちゃ

内容が多様なため、分類して表示する。

表 III-1：年齢別手作りおもちゃの種類（複数回答）

	0歳児	1歳児	2歳児	混合
見立てつもり遊びのおもちゃや仕切りのための道具	1	19	26	
のりもの（車、電車）	1	4	3	
道路マット・専用道路・線路	1	3	1	
手指を使う遊び（ひも通し、ボタンはめ）	3	8	11	1
楽器（マラカス、タンブリン）	2	9	3	
転がすおもちゃ（ボール転がし、どんぐり転がし）	2	2	3	
穴に落とすおもちゃ	6	10	6	
パズル・型はめ			6	2
ゲーム（魚釣り、輪投げ、ボーリング）			6	
貼り付けるおもちゃ	2	1		
積み木	1	3		
感触遊び（ウレタンボール、感触マット）	1	3	1	
その他（スノードーム、どんぐりの砂時計）	1	4	7	

アンケートの回答から、年齢が高まるにつれ、触ったり落としたりという遊びから、想像や工夫をして遊ぶための手作りおもちゃを使用していることがよくわかる。子どもの認知機能の発達とともに、次第に興味を持つおもちゃが変化していくわけである。表象機能の発達により、見立てつもり遊びが盛んになり、次第に言葉のやり取りが活発になっていくことから、おもちゃを介した遊びの変化が生まれる。見立てつもり遊びのおもちゃでは、ままごと遊びの食べ物・キッチン台・冷蔵庫・テーブル・椅子おんぶ紐、手提げ袋といったものの他に、2歳児頃には遊びに集中できるように、子どもでも移動可能なパーテーションや他の遊びと分け境界を作るための道具を牛乳パック等を利用して作られていることが窺えた。また、なりきって遊ぶための病院の診察券・薬・体温計、スーパーのレジ・カウンターなど日常体験の再現がしやすいような環境作りのための道具が工夫されている。こうした保育者のアイデアが主体的な遊びを促し、遊びをより豊かにしていると考える。

②手作りおもちゃへの子どもの反応

表 III-2 子どもの反応（同様な回答は纏める）

0歳児	集中してよく遊び、笑顔で楽しそうに遊ぶ。 気持ちよさそうに感触遊びを楽しむ。 じっくり遊ぶ姿が見られる。 振って音が出ることを楽しんでいる。 振ったりマイクに見立てて歌う真似をする。 入れたり出したりの繰り返しをしている。
1歳児	穴落としはとても集中して繰り返し遊ぶ。 タオル地の人形は感触を楽しんだり、寝かして遊んでいる。 繰り返し同じおもちゃで遊ぶ。 片手に手作りおもちゃを持ちながら他の遊びをする。 積み上げたり崩したり、声をあげて遊んでいる。 「カンカンカン」といいながら電車を走らせたり、「オイシイ」「アリガトウ」の言葉のやり取りができる。 ものを出したり入れたりして遊ぶ。 笑顔で意欲的に遊べる。 自分なりの遊び方を見つけて遊ぶ。
2歳児	仕切りは自分で組み立てて遊びを広げている。 ごっこ遊びのセットでは、保育士や友達との会話を楽しんでいる。 興味を持ってじっくり遊んでいる。 毎日繰り返す中で、想像以上のごっこ遊びが広がった。 自分のなりたい役を楽しんだり、どのように遊ぼうか考えている。 洗濯ばさみと格闘し、出来ると歓声を上げ喜んでいる。 見立て遊びの際に、当初の目的と違う使い方が見られ、工夫して遊んでいる。 子どもどうして遊ぶきっかけになっている。 何度も使って遊んでいる。 イメージを膨らませて遊ぶ。

	新しいおもちゃに興味を持つ。 パズルは考えながら遊ぶ。
混合クラス	何度も繰り返し遊ぶ。 保育士の想像以上の遊び方をする。

子どもの反応についての回答から、子どもの発達を捉えた手作りおもちゃは、子どもが興味を持って集中して遊べるのが窺える。おもちゃをタイミング良く提供することで、子どもの遊びも広がる。常設の既製のおもちゃではなく、新しく提供した手作りおもちゃは子どもにとって新鮮味があり興味を引く。2歳児になると、何度も繰り返し遊ぶ中で、作成者の意図とは違う遊び方を見つけ、工夫しながら遊ぶ姿が見られるようになることが分かる。こうしたアンケートから、子どもの興味を引くおもちゃにより、創意工夫した遊び方や主体的な遊びが見られるようになることが窺える。

③制作や使用法で気を付けたことや困った事

表 III-3 使用法で気を付けたこと困った事（同様な回答は纏める）

0歳児	誤飲しないように、怪我をしないように考えた。 強度に問題があった。 ままと遊びの際に身に着けるグッズのサイズに悩んだ。 ペットボトルの蓋の固定が難しい。テープを貼ってもはがしてしまう。 思いついても作る時間がない。
1歳児	人形などは長く使うし、使う頻度が多いのでほつれたりするが、直せない場合もある。 保育士が考えた通りの遊び方ではなかった。 時間がないので数多く作れない。 制作に時間がかかる。 どのように遊ぶと危険がないか等の安全性を考えて制作している。 すぐに壊れる。 新しいおもちゃは取り合いになるので数量が必要。 作りたい時期にタイミングよく作れない。 フェルトのものを口に入れてしまう。 衛生面（コロナ対応に困る）
2歳児	壊れやすい。 数量を沢山作らないと取り合いになる。 作る時間がない。 口に入れるので、洗濯や消毒ができるかどうか悩む。 タイミングよく作ってあげられない。 発達にあったものを選ぶときのおもちゃ選びに悩む。 安全性について考える。 実際に子どもが遊ぶと、意図した遊び方と違うことがある。 フェルトの毛玉に困る。
混合クラス	壊れやすい。 素材がすぐ手に入らない。

回答から、保育士は安心安全に遊べるおもちゃづくりを心がけているが、手作りおもちゃは壊れやすいという欠点があり、強度に悩んでいる。人気のおもちゃは取り合いになるので、遊びの環境としては数量的な配慮が必要であるが、作る時間がないという現場の慌ただしさの中の苦悩も窺える。

また、困ったこととして保育士の意図とは違う遊び方をするという回答もあるが、子どもがおもちゃに興味を持ち、遊び方を工夫するという点でみると、子どもの主体性を引き出ししているという面で評価ができる。子どもが主体的に遊びに取り組めるように手作りおもちゃがその役割を果たしていると言える。

④手作りおもちゃの必要性和意義について

表 III-4 必要性和意義 (同様な回答は纏める)

子どもの発達にあった玩具を提供できる。	11	子どもに対する保育者の思いが高まる。	1
子どもの興味に合わせられる。	3	安心安全な保育ができる。	1
温かみを感じられる。	3	子どもの育ちに必要である。	1
身近な素材を再利用できる。	2	工夫して遊びを発展させられる。	1
既製品にないアイデアを感じられる。	2	子どもに安心感がある。	1
子どもの感性や指先の発達に必要。	1	子どもが簡単に遊べる。	1
子どもの育ちを見直すきっかけになる。	1	子どものイメージ、遊びが広がりやすい。	1
感触を楽しめる。	1	おもちゃを身近に感じる。	1
大きさを変えて楽しめる。	1	保育者の思いが詰まっている。	1
保育者が子どもの発達を把握できる。	1	玩具に愛着が持てる。	1

手作りおもちゃの必要性和意義についての質問では、未回答者も多かったが、子どもの発達にあった玩具が提供できることを示している回答が一番多く、心身の発達が著しい乳児保育には欠かせないものとなっていると考える。回答にばらつきがあったが、多忙な勤務状況の中でそれぞれの保育者が意図をもって作成していることが窺えた。

IV. 環境としての3歳未満児の手作りおもちゃ

1. 手作りおもちゃのある環境

乳幼児は生活と遊びの中で五感を通し様々な経験をしながら育ち学んでいくことから、その生活環境は重要である。多くの保育現場では、手作りおもちゃは普段の遊びの中でいつでも遊べるように、子どもの手の届きやすいところに置かれている。既製のおもちゃの中に、手作りおもちゃがあることで保育室全体が温かみのある雰囲気になっていることも確かである。特に保育者がおもちゃを特定しなくても、既成のおもちゃではなく、手作りおもちゃを使って遊ぶ姿が見られる。

保育所に訪問した際に、午後のおやつ後の自由遊びの時に、病院ごっこをしている2歳児の

子どもの姿を見かけた。看護師になりきっている子どもは、手作りのナース帽をかぶり「次の患者さんどうぞ」と呼び掛けている。そこに人形を抱いた子どもがやってきて診察をしてもらっている。「お熱はありますか?」「はい。お薬です。」と、手作りの薬(色水)を渡している。子どもどうして2歳児らしい会話をしながら、自分が体験したことを再現している様子が見られ、其々がなりきって遊んでいる。こうした遊びには役になりきるための小道具である手作りおもちゃが必要になってくる。薬として渡していた色水は別の遊びではジュースやさんごっこにも使われる物と思われる。

また、0歳児クラスでは、保育士がかごに入ったマラカスを床において、子どもにマラカスを渡し、CDをかけ始めた。運動会の時に練習していた曲だと伺ったが、曲が鳴り出すと0歳児の子どもが両手に持ったマラカスを振って楽しそうに身体を動かし始めた。曲が終わるとしっかりポーズを決め嬉しそうな表情を見せていた。子どもたちがお気に入りの曲であり、マラカスを振ることを楽しんでいることがよく分かった。(事例2がその様子である。)

こうした保育現場の実践からも、子どもの年齢にあった手作りおもちゃが子どもの遊びをより豊かにしていることがよく分かる。

2. 空間を作る環境構成に必要な手作り道具

表 III-1 に示したように2歳児には見立てつもり遊びのための手作りおもちゃや道具が多く示されていた。それぞれの遊びを仕切り、集中して遊べる衝立や柵のようなものや、遊びの空間作りのための大型積木のような手作り道具である。こうした衝立や大型積み木がお家になったり、お風呂になったり、電車や車になったりする。なりきって自分の世界で遊びを広げていくための大切な空間といえる。その衝立は毎回の自由な環境作りに使用されるだけでなく、常設のままごとコーナーを作るための衝立であったりする。こうした道具も手作りおもちゃの一部としてとらえることができる。

また、道路マットや線路といった車や電車を走らせるために作られたものもあり、子どもの想像力をかりたてる環境づくりとなっている。

V. まとめ

乳児保育における手作りおもちゃの意義は、アンケート結果からも分かるように、子どもの発達に合わせたおもちゃをタイムリーに提供できることにある。0歳から2歳の感覚や運動機能が著しく育つ年齢では、おもちゃに触ってみたい、おもちゃで遊びたいという子どもの探求心が感覚や運動機能の発達も促していく。子ども一人ひとりの発達に合わせたおもちゃを提供することで、子どもにおもちゃへの興味をもたせ、遊びをより主体的で楽しいものにしていくのである。

手作りおもちゃには既製のおもちゃにはない手作りの良さを見出すことができ、保育室の環境の一部として存在するだけで温かみを感じるの、子どもの状況を知る保育士が、子どもが

おもちゃを使って遊ぶ姿を想像しながら作るという思いが込められているところにあると思う。

手作りおもちゃの欠点として壊れやすいところや、保育業務が忙しく量的に作れないところもあるが、子どもの興味の向いているものを、タイムリーに提供できる良さがある。時々、保育士の意図と違う使い方をしたとしても、安全な遊び方であれば、子どもの遊びへの主体的な工夫と捉え喜ぶべきだと考える。

また、0歳児は表象機能の発達とともに言葉が増えてくるので、保育士とのかかわりや会話を楽しみながら遊ぶことが大切である。見立てつもり遊びのきっかけづくりにも手作りおもちゃは役割を果たしていると考えられる。

3歳未満児の場合はおもちゃを口に入れるということも多い。これまで筆者の考案した手作りおもちゃは、段ボールなどの紙製品が多く衛生面での課題があった。最近は表面のコーティングとしてOPPテープやブックカーを使用するようにしている。こうした課題はフェルトで作ったおもちゃにもあるので、布製のものは洗濯しやすい材質に変更していきたい。

筆者が循環社会の重要性に視点を当て、身近な素材を再利用（リサイクル）して作ってきた手作りおもちゃは、子どもの遊びにとって価値のある物的環境としての役割を果たしてくれることを願っている。

謝辞及び付記

研究に当たり、アンケートにご協力頂きましたK市役所幼児教育・保育課とK市の保育士の皆様、実践にご協力いただきましたH保育所の皆様に心よりお礼を申し上げます。

なお、アンケート等の実施、写真掲載については桜花学園大学倫理審査委員会の承認を得て、本人及び子どもの保護者の承諾を得て掲載しています。

引用文献

- (1) 清水益治・森敏昭（編著）「0歳から12歳児の発達と学び—保幼小の連続と接続に向けて」北大路書房 2013 p.14

引用データ

- ・表I-1 清水益治・森敏昭（編著）「0歳から12歳児の発達と学び—保幼小の連続と接続に向けて」北大路書房 2013 p.5
- ・図I-1 一般社団法人 日本家族計画協会 ホームページ https://www.jfpa.or.jp/mother_child/prevent/002.html 閲覧2020/12/26

参考文献

- ・厚生労働省（編）『保育所保育指針解説』フレーベル館 2018 pp.12-16
- ・汐見稔幸・小西行郎・榊原洋一（責任編集）『乳児保育の基本』フレーベル館 2007

- ・ 勅使千鶴『子どもの発達と遊びの指導』ひとなる書房 1999
- ・ 田中真介（監修）乳幼児保育研究会（編著）『発達がわかれば子どもが見える』ぎょうせい 2009
- ・ 西本望「おもちゃ（玩具）の循環社会での意義—子どもの発達と玩具での遊び—」『廃棄物資源循環学会誌』Vol. 23 No. 3 2012
- ・ 高井芳江・村田尚子・野原由利子「乳幼児にとってのおもちゃの役割についての研究—機能遊びから象徴遊びへそして実物思考へ—」『名古屋芸術大学研究紀要』第40巻 2019
- ・ 前林英貴「乳児保育における手作りおもちゃの意義と学び」『人間と文化』 2017

（受理日 2021年1月6日）